

風姿花伝第五、奥儀云 一 序・風姿花伝の謂れ

抑、風姿花伝の条々、大方<sup>おほかた</sup>  
外見の憚<sup>はばかり</sup>、子孫の遲疑のた  
め注<sup>しるす</sup>といへども、たゞ望<sup>のぞ</sup>む  
所の本意と者<sup>は</sup>、当世此道の  
輩<sup>ともがら</sup>を見るに、芸の嗜<sup>たしな</sup>みは  
疎<sup>おろそ</sup>かにて、非道のみ行<sup>ぎやう</sup>じ、  
偶々<sup>たま</sup>当芸に到<sup>いた</sup>る時も、たゞ

〔口訳〕

以上記して来た風姿花伝の条々は、  
大方の人々の外見を憚り、子孫の庭訓  
を残す為に記したものであるが、自分  
として特に望みたいと思ふ所は次の点  
にある。即ち現今、此の能楽の道に従  
ふ連中を見ると、芸道に対する錬磨  
工夫を疎<sup>おろそ</sup>かにし、能楽以外の事に手を  
出す有様であり、たまたま此の能芸に  
於て相当の境地にまで到り得ても、た  
だ一時的な悟りで良い気になつたり、  
一時の名望利得に染着してしまつたり  
して、その結果芸道の本源を忘れ邪路  
に走るといふ状態で、正にこれ能楽道

一夕の氣証、一旦の名利に  
染みて、源を忘て流を失ふ  
事、道既に廃る時節と、こ  
れを歎くのみなり。然ば、  
道を嗜み芸を重んずる所、  
私無くば、などか其徳を  
得ざらん。殊更、此芸、

の類廃破滅の時節かと、慨歎の至に堪へないものがある。ただ、全く至誠無私の心を以て、此の道に錬磨工夫をつみ、芸を尊重して行くならば、必ずや其の徳を得て奥儀を究めるに到るであらう。殊に、此の能芸といふものは、先人の風を継承してゆくものではあるが、自己の工夫公案といふものから生れ出づる芸態もあるので、言語筆舌でこれを悉く説き伝へるといふ事は不可能である。ただ先人の風を得て、心から心に、以心伝心的に伝へてゆく花であるから、これを風姿花伝と名付ける

その風を次といへども、自  
力より出づる振る舞ひあれ  
ば、語にも及がたし。その  
風を得て、心より心に伝る  
花なれば、風姿花伝と名付  
く。

のである。

以上は奥儀篇の序とも見るべき段である。風姿花伝の年来稽古から物真似条々、問答条々と書き、それに神儀篇を加へて、この奥儀篇で終結せしめるに当つて、かやうな秘書を書くに至つた本意をのべたのである。一般世人の眼に触れる事を恐れ、子孫の庭訓を遺す為に記したものであるとのべ、次に、彼の時代の猿樂者流が、真に道を尊び守る精神に乏しく、一時的な世人の賞讃に安堵して、生涯を通して習ひ徹るといふ気魄の欠けてゐる事を慨歎して居る。これを、老人共通の繰言と笑ふ者が青年者流にはあるが、私は世阿弥の心を思ふと、芭蕉が晩年に「此道や行く人なしに秋の暮」と吐息と共に呻き出した、あの名人のみ感

ずるといふ堪へ難い寂寥の感を、この数語の中にも聞くやうな感がする。世阿弥はただ、私心を去つて、至誠心より道を嗜み芸を重んぜよといふ。その境地から花を自悟自得せよといふ心持である。能芸は勿論先人の風を継承してゆくものではあるが、花は継承する事は許されない。花は自ら咲かすべきもの、そこに自己の工夫公案の必要があり、芸の錬磨の必要がある。そして、それ等の境地より生れる花は、その境地に到り得てはじめて、以心伝心、不言不語の間に伝へられるわけである。風姿花伝といふ名はこの意味を寓してゐると説くのである。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『世阿弥十六部集評釈 上巻』能勢朝次著